

服部四郎先生を偲んで

井 上 和 子

服部四郎先生の言語学者としての御偉業については、私には語る資格もないのですが、言語学の底辺を広げ、これを一般知識人に浸透させたいという先生の熱情に触れる機会に恵まれた幸いを思いおこしながら、ありし日の先生のお姿を偲んでいます。

服部先生と私とは、教室ではなく広い意味での「仕事」を通じて初めて個人的に出会いました。それは、1964年に私がミシガン大学に博士論文を出して帰国した秋のことでした。青山学院大学経済学部の教授だった榊原巖先生が渋谷の御自宅に作られた東京外国語センター（TEC）の教材作りに参加してほしいとの誘いを受けました。全般的な指導は服部先生が引き受けられたとのこと、大変野心的な企画だという印象を持ちました。この企画では、英語と日本語の教材が作られましたが、私は英語の方に参加しました。服部先生は既成観念にとらわれずに、綿密に英語の基礎構造を確かめようと、作業には常にネイティブ・スピーカーを同席させ、フィールドワーク方式でネイティブの反応から問題点の解答を引き出していかれました。時には朝9時から夜8時、9時まで続くことがあり、一人では間に合わず複数のネイティブに参加して貰うこともありました。私はアメリカの大学院でフィールドワークの授業をとりましたが、これほど綿密な作業を経験したことがなかったのです。また、厳密な言語分析と教材作りとの間の隔たりを感じることも多く、服部先生がそんな葛藤にもひるまず努力されたお姿は未だに眼に焼き付いています。服部先生の誠実な研究姿勢と言語学振興への熱意に応じて、TECでは多額の資金を出して海外の著名な言語学者を毎年招へいし、言語学国際セミナーを開きました。1966年の第一回には、チョムスキー、続いてヤコブソン、ハレ、イヴィッチ夫妻などが招かれ、活気のある夏期セミナーが続きました。これは当時の若手研究者には特に大きな影響を与えました。この事

業は現在も続いているのですが、その蔭に常に服部先生の細大もらさぬ心配りがあったことは忘れることができません。国際セミナーが始まった1966年に服部先生は、TEC（現在のラボセンター）の中に東京言語研究所を発足させ、理論言語学講座を年中行事として始められました。今年までのこの講座の受講者の総数は約5500名に上るということです。服部先生は最後までこの研究所の運営委員長の重責を果たされたのです。理論言語学講座は服部先生が社会に遺された遺産の一つと言ってよいと思います。

服部先生が定期的な講座や国際セミナーの企画と運営の為に東京言語研究所に集められた様々な分野の言語学者の協力態勢ができていたことも一つの原動力になって、先生の次の大事業が実現しました。それは、1982年に東京で開かれた第13回国際言語学会議の国内委員長としてのお仕事です。この会議の開催には、私のように過去のいきさつを知らない者には理解出来ないような障害がありました。服部先生は1928年にヨーロッパで発足したこの国際会議の歴史と運営方法について精力的に説明を続けられました。ところで、会議開催の二年前にプログラムを決定する運営委員会が、国際会議運営委員会と国内委員会の合同で行われることになっています。この時も1980年4月の終わりに、会長のロビンズ博士と事務局長のユーレンベック博士が来日し、合同会議が行われました。その席上、服部先生から私にこの国際会議の事務局長を務めるようにとのお話があり、突然の事に私はかなり躊躇しました。しかし結果的には、北村甫氏（アジア・アフリカ言語文化研究所元所長）、奈良毅氏（アジア・アフリカ言語文化研究所前教授）、長嶋善郎氏（学習院大学教授）など服部先生の「内弟子」と、下宮忠雄氏（学習院大学教授）や私など「外弟子」とでもいう立場の者が協力して会議運営に当り、種々の難関を越え、煩雑な事務処理を行うことができました。最も心配された財政上の問題についても、先生ご自身が莫大な私財を寄付されたのです。ところが、開催日が近づくにつれて参加者数が急激に増え、会費収入が予算を上回る結果になりました。会議が非常に盛り上がったことは言うまでもありません。それまで日本では余り知られていなかった国際言語学会議についての認識もかなり広がったという感触を持ちましたし、アジアで初めて開かれた言語学の国際会議として国際的にも注目されたようです。

この国際言語学会議は、プログラムの内容が非常によく練られ、幅広い学者の層を動員できたと思います。その理由の一つは服部先生の言語学者としての幅広く深い見識でした。種々の分野を代表するプログラム委員の意見を最大限に生かし、時間をかけて計画を練られたこともよい結果につながりました。また、この会議にはワーキンググループの導入という新しい試みを行いました。これは若い学者の熱心な主張を取り入れたものです。今でも東京会議のこの新機軸を評価する声が聞かれます。

服部先生は非常に厳格な反面、面白いと思われる考えには、熱心に耳を傾けられました。アメリカの大学院の経験しかなかった私などは、取るに足りない考えをよく辛抱して聞いて下さったという思いを常に持っていました。また、「この人は面白い考えを持っているから」と言って有名、無名の多くの学者や研究者を先生の企画された学問的な活動に招き入れて下さったお蔭で、その末席を汚していた私は大いに視野を広げることができました。これが今日の私の大学人としての仕事の糧になっていることをいつも感謝しております。

服部先生は1987年に当時の東ベルリンで開かれた第14回国際言語学会議に出席されましたが、この会議には、多くの日本人学者が参加し、研究発表も37という予想外の数に上りました。先生が東京での国際会議開催のためになさったご苦労が着々と実っていることを実感した貴重な経験でした。このベルリン会議を最後として先生とゆっくりお話しする機会に恵まれませんでした。30年の長い間、学問と社会の接点で服部先生の人格に触れ、ご指導を受けたことをかけがえの無い幸運であったと感謝しています。先生の亡き後も先生の言語学に対する熱情が必ず多くの人に受け継がれていくものと信じ、先生のみ魂が安らかにお眠りになるようお祈りしています。

服部四郎先生を悼む

西 田 龍 雄

日本言語学会元会長服部四郎先生は、本年一月二十九日未明、藤沢市の病院で永い眠りにつかれた。享年86才であられた。

先生は昭和17年（1942）に東京大学文学部助教授に着任され、同24年に教授に昇任、言語学講座を担当された。そして同44年3月に退官されたが、その間東京大学において、多くの優れた人材を育成されると共に、終始日本の言語学界の指導者の一人として活動され、斯学の発展に多大な貢献をなされたことは改めて述べるまでもない。

私のように教室で直接にお教えを受けていないものの、ご論著からあるいはご講演を通して、服部言語学の学恩を得た者も少ない数ではないであろう。

先生のご業績は言語学の全域にわたっていたが、その中心領域を大雑把に分けると、1. 独自の記述言語学理論の確立と実践 2. 日本語、琉球方言、アイヌ語研究に対する方法論的指針と具体研究 3. アルタイ諸語研究の世界水準への推進になろうかと思考する。もちろんそれらは相互に絡って相乗的な効果が生み出された。

先生のご業績を通じて見られる大きい特徴は、書齋に座って欧米学者の研究成果を主に紹介する学問が未だ続いていた時期に、もちろんそれも大きい寄與ではあったが、いち早くフィールドワークを基盤とし、そこから独自の研究方法を組み立て、それを実際に使ってみる言語学を造り上げられたことにある。

お書きになったものから推察すると、私の拙い経験からしても、もしインホームントが常人であれば、困惑して数時間で逃げ出し、二度と顔を見せることがないに違いないような厳しい調査法をとっておられたらしい。それが先生の一貫して厳密な学風の底流となっているように見受けられる。

独特の鋭い直観に支えられて、音声の精密な観察を通じて周到な材料を集め、

それに精緻な分析を加えて、明晰な論理で論を展開された。そして徹底して実証的であった。

三省堂より刊行された著作集『アルタイ諸語の研究』（全五巻、第五巻は未刊）は、発刊のつど頂戴したが、収録された精細緻密な論稿を拝読して、いつも深い感銘を受けた。以前外国で発表されたものなど入手し難いご論文をまとめて戴いたことがあったが、トルコで刊行したものなど自分で校正していないため誤植が多くて困ると大へん気にしておられた。先生の厳密さからすれば、一つの誤植さえお許しにならなかったのであろう。

人はそれ自身が時代を造るのでなければ、時代に制約されて生きねばならない。先生は、確かに戦中戦後を通じて困難な時期を、一貫して学問一筋に生き抜かれたが、その時々の流れを巧みに効果的に活用されて、苦難を幸運に転じられたのではないかと思う。明治以来、系統的にも類型的にもわが国の言語研究にとって重要な対象言語であったアルタイ諸語の研究を目標にされたが、日本のアジア進出が盛んになり始めた時期と重って、若き日は、東北アジアの各地をご堪能な語学力を駆使して駆け回られ、すばらしい成果を蓄積された。そして戦後は、米国の学界との交流を通じ、また東京言語研究所を中心に欧米の著名な言語学者を招へいし、日本の言語学の発展に重要な役割を果してこられた。そのご活動は、第13回国際言語学者会議を日本で開催する計画に結集し、見事な成果を収められた。

日本言語学会が創設以来50年を越え、今日のような発展を見たのは、歴代会長の裁量と各委員そして会員の皆さんの協力の賜物であるが、その基盤は、昭和49年に実現したそれまでの委員長を中心とする運営体制から、会長を頂点とする新体制に移行したところにあるように思える。この移行には服部先生をはじめ当時の長老諸先生の大きいご盡力があった。

まず新しい制度の会長は、個人会員全員の選挙によって選出する方針が確立され、初代会長に服部四郎先生が就任された。その時の事務局は TEC（東京言語研究所）に置かれたが、私は常任委員の一人として種々のご相談にあずかった。当時の先生の念頭にあった学会の理想は、アメリカの学会組織であったのであ

うか、いつも話しておられたのは、ともかく会長が絶対的な権限と一切の責任をとって会の運営にあたる。機関誌の編集も編集委員長が大きい権限をもち、論文の採択を行うと共に全責任を負う。そして会長・編集委員長の任期を2年とし就任は一回に限る。委員会はこの案に同意した。その後周知のように、委員会の協議を経て、学会運営は新しい方向に展開したが、上記のような服部構想のもとに運営された日本言語学会の歴史の一齣があった。

服部会長の時代は、新しい制度が始ったばかりのこととあって、頻繁に常任委員会が開かれ、会長ご自身が作成された自筆の資料が青焼きされ、席上配布された。そして疑問点は徹底して追及された。それには反撥もあったが、先生は自分は頑固だとおっしゃって、一向に苦にしておられなかった。安易に妥協せず完璧を期された先生の学風と通じるものを、そこに見た気がした。

先生は、そのご業績によって1971年には文化功勞者に、そして1983年には文化勲章を受けられた。その先生はもう学会に姿をお見せになることはない。しかし日本の言語学界に確かな大きい足跡を残していかれた。

先生のご逝去に衷心より哀悼の意を表し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

服部四郎先生のご逝去を悼む

梅 田 博 之

日本言語学会 顧問 服部四郎先生は、本年1月29日午前零時3分、神奈川県藤沢市の湘南長寿園病院において、肺炎のため、八十六歳のご生涯を閉じられました。一年半以上ご病床にあって後のご逝去でしたから、ある程度その日の来るとは予測でき覚悟していたことではありましたが、やはり訃報に接した時の衝撃は大きく、まことに哀惜の念にたえません。

服部四郎先生は、日本言語学会設立当初から会員として本学会発展のためにご尽力くださいましたが、特に1973年9月に発足した制度検討小委員会で、服部先生は、当時の長老諸先生とともに、会長の個人会員による直接選挙制、任期制、地域別の会員数に対する比例代表方式の選挙による委員会組織、編集委員長とその責任権限の確立、各種選挙細則の制定などを骨子とする「新会則」を作られて、学会を全会員に開かれたものとされました。そして新会則発効後の初代会長に選出された先生は、1975・1976年度の2年間、学会の運営に情熱を傾注され、新会則の定着を図り、学会の今日の発展の基礎を作られました。

服部先生は、夙に、言語学分野における国際交流に努められ、東京言語研究所運営委員長として1966年以降海外の著名な言語学者を招聘して言語学国際セミナーを七回にわたって開催され、また1982年には第13回国際言語学者会議組織委員会会長として同会議を東京で盛会かつ成功裡に開催され、日本の言語学界の国際化に力を尽くされました。

服部先生は、ほぼ30年の永きにわたり東京大学において後進の指導に当たられ、停年ご退官の後には東京言語研究所において理論言語学講座を開設され、一般の知識人・学生を対象に、言語学の教育・普及に努められましたが、しかもそれは先端的な様々な分野の言語学者を講師陣にそろえ内容的に学問的水準をいささかも落とすことなく行われました。

また、服部先生は、1960年日本学術会議第32回総会で発足したアジア・アフリカ研究特別委員会に特別委員として参加し全国共同利用の「アジア・アフリカ言語文化研究所」の設立に力を尽くされ、1964年同研究所設立後も運営委員（1979年1月ご退任）としてその研究活動や人事に関し、多大な指導・協力を果たされました。

服部先生の学問的なご業績については、私などがここでことさらに申し述べる必要もありませんが、日本語・琉球語をはじめ、蒙古語・満州語・タタール語等のアルタイ諸言語、朝鮮語、中国語、そしてアイヌ語など、主として東アジアの諸言語を対象として、共時論的研究・通時論的研究の両面にわたり、常に一般言語学的視点に立って、言語事実の精密な観察・分析に基づく、数多くの研究成果を発表されると同時に、それら個別言語の記述的研究に即し、かつ一般言語学的立場に立つ、独自の記述言語学の理論・方法の確立に努められたことは言を俟たないところであります。

先生は、そのご業績によって、1971年には文化功勞者として顕彰され、1983年には文化勲章を受賞されました。

ここに謹んで服部四郎先生のご冥福をお祈り申し上げるとともに、先生の言語学界に対する生前のご貢献・ご尽力に心からの感謝を捧げるものであります。

さて、私が初めて先生にお目にかかったのは、1952年夏、先生がアメリカご出張からお帰りになった時で、それ以後、音声学・音韻論・意義素論・文と統合型の問題等、いわゆる服部言語学が構築され、展開されていった、ちょうどその時期に学生としてお側にいてご指導を受けることができたのは本当に幸せでした。その後、先生が設立に尽力されたアジア・アフリカ言語文化研究所の、現地調査を旨とする自由な研究環境の中で仕事をするのができたのもまことにありがたい限りであります。先生の思い出は尽きませんが、1968年秋に韓国文教部（当時）の招待で韓国を旅行された際、私はソウルにいて全日程をお供することができたのは忘れ得ぬ思い出のひとつです。ご旅行は、昼は視察・観光をされ、夜はインフォーマント調査を当時の夜間通行禁止ぎりぎりの時間までなされ、しかも早朝はホテルのお部屋から韓国語の発音練習のお声が聞こえて来るといった

具合で、ご旅行の合間に、まず基礎語彙を意味と音の両面から学習するという、先生の当時の言語教育の方針に則って作った教材を実際に試しておられたのでした。先生が韓国語に対して強いご関心をお持ちであることはいうまでもありませんが、いわゆる異文化に対するご関心の深さにも感銘を受けました。

先生のご指導を直接受けて行った仕事のひとつにソウル方言の母音の通時的変化に関する研究がありますが、通時的変化においては、一度変化したものがまたもとに戻ることはないという先生のお教えのおかげで、解明への道筋が非常にはっきりしました。また、1984年4月から私はNHK教育テレビでいわゆるハングル講座を担当したことがありましたが、先生はいつもご覧になっておられたようで、早朝の放送が終わると必ずといってよいほどお電話をいただきました。単語の意味と音形との連合の観点から、発音練習は必ずまず日本語の意味を示してからやるべきだ等、言語の本質に基づいた言語教育の方法等をアドバイスしてくださいました。

学生時代から、私はいつも先生からお叱りを受けてばかりいる不肖の弟子でしたが、先生のお教えはいつもありがたく、なによりも先生のお人柄にひかれるところ大でした。私事にわたり恐縮ですが、先生が渋谷の東京言語研究所におられた頃、わたくしは一身上の変化をご報告に伺ったことがあります。先生はなんのお小言も、批判めいたこともおっしゃらず、私の話を淡々とお聞きになり、地下の寿司屋にさそって下さって、注文したちらし寿司をつつきながら「君と（のつきあい）はもう何年になるかなあ」などとおっしゃいました。先生のその時のご態度に私は先生の慰めの気持ちを感じました。先生は本当にいい方でした。先生が倒れられて病床にあられること一年半、お見舞いに行かせていただいた折り、次第に手足が縮こまっていかれるのを伸ばしてさしあげようと思って先生の手をとりましたが、それが先生のお体に触れた最初で最後の機会となってしまいました。その時の、先生のお手は柔らかく、そしてとても温かだったことが思い出されます。嗚呼。

服部四郎先生の御霊安からんことを心からお祈り申し上げます。

弔 辞

湯 川 恭 敏

厳しい冬も峠にさしかかりつつあった一月二十九日午前零時三分、服部四郎先生は、八十六年八ヶ月のご生涯を閉じられました。ご家族ご親戚の方々の胸中は、察するにあまりあり、私ども教え子一同も断腸の思いであります。

服部先生は、その長い東京大学におけるご教育によって私どもを含む数多くの言語学徒をお育てになり、また停年ご退官ののちも、多くの人々を指導されました。先年、文化勲章を受章されたことは、先生のご薫陶を受けたすべての人にとって、大きな喜びでありました。

服部先生の学問の対象は極めて広く、音声学の分野、音韻論・文法論・意味論などの理論的分野とその実践面への適用、日本語方言アクセントの分野、モンゴル語をはじめとするアルタイ諸語研究の分野、アイヌ語研究の分野、日本語系統論の分野等々と、一生懸命列挙しても、何か重要なものを落としているのではないかとの不安が最後までつきまといます。そして、さらに重要なことは、これらの分野のどれをとっても、服部先生の大きなご貢献に目を奪われない分野はないということでもあります。

どの学問にも、その発展の歴史の中で、それまでとは全く異なる画期的発展をとげる時期があり、しかも、その発展がしばしば一人もしくはごく少数の人によって基本的に達成されるということがあるようです。言語学の歴史の中で服部先生が果たされた役割はまさにこれであり、日本の言語学は服部先生の大きな貢献によって、科学の名にふさわしい水準に到達したのであります。特に、私は、その言語が文字を有しようとするまいと、文献があろうとなかろうと、それを調査し研究することが完全に可能なのだということを、服部先生ご自身の研究で証明され、また、私どもにそういう確信を与えられ、手順をお教えになったことの重要性を強調したいと思います。

もちろん、私どもは、服部先生がおっしゃったり書かれたりしたことすべてが、まったく誤りを含まないものであるとか、これ以上発展させる余地のないものだとかとは思っておりません。修正すべきところは修正し、発展させるべきところは発展させるのが、我々残された者の義務でありますし、我々のあとに続く人々の義務でもあると思います。しかし、そのような少し口幅ったいことがいえるのは、私どもが、服部先生のご指導を既に受け、あるいは、その書かれたものに接することができる現時点の話であって、服部先生のご業績を見る時、いったいあの時期にどうしてこんなことがいえたのだろうか、どうしてこんなことが書けたのだろうか、信じられない思いがすることがしばしばあります。

服部先生は、私の知るところ決してそんなに器用な方ではいらっしゃいませんでした。しかし、その学問のご情熱はすさまじいといえるほどであり、おそらくご自分であまり得意でないと感じられたところがあれば、それを超人的努力によって克服されたのだと思います。その結果、世の中にこんなに器用な人がいるのかと、たとえば先生の音声学の授業に出た者すべてが感じるような、そういうレベルに到達されていたのだと思います。

服部先生は、東大における教育にあたっては、極めて厳しくまた熱心でられました。表面的には、非常に厳しくて学生がお顔もまともに見られなかった時期と、打って変わって優しく指導なさった時期がありました。しかし、学問の厳しさは、そのどちらの時期にも貫かれ、優しくなられた時期においても、学生が重要な問題を未解決のまま演習などで発表すると、「僕なら、それ解決しないと、夜も眠れないよ」とおっしゃったことが一度ならずありました。また、服部先生は、熱心さのあまり、時間を超過して講義されることがよくあり、ある年の卒業生が、後輩の幸せのために、柱時計を寄贈して演習室にかけたこともあったようです。

先生は、私ども教え子の面倒を親身になって見て下さいましたし、教え子の不幸・困難についてわがことのように心を痛めて下さいました。しばしば、経済的困難にぶつかった教え子のために、収入の途を探して下さいましたし、私の学生時代に、父につづいて母をなくしたことを申し上げた時に服部先生がなさった悲しそうなお顔は、今でも鮮明に思い出されます。これは、服部先生のお嫌いなお

世辞でも何でもなく、「服部先生という人はいい人だった」というのが私どもの実感なのであります。

先生が助教授、教授として二十七年間指導された東大言語学研究室も、昔に比べてにぎやかになり、今また新しい発展の可能性が感じられるようになってきたことをご報告することが、服部先生の御霊をいくらかでもおなぐさめすることになれば、と存じます。

私ども教え子一同は、先生のご遺志に沿って、日本の言語学の発展のため、今後とも全力を尽くすことをお誓いいたします。不肖私も、その一人として、微力ながら頑張りたいと思います。

服部先生、安らかにお眠り下さい。

以上をもって、教え子を代表してのお別れのことばといたします。

(以上は平成7年2月16日に行われた故服部四郎先生のご葬儀で湯川恭敏氏が東京大学文学部言語学研究室主任として奉読した弔辞を同氏ならびにご遺族のご諒解をえてここに掲載させていただいたものである。)

服部四郎博士 略年譜

- 明治41年 5月29日 三重県鈴鹿郡亀山町（現亀山市）に生まれる。
- 大正10年 3月 亀山尋常高等小学校尋常科を卒業。
- 大正14年 3月 三重県立津中学校第4学年を修了。
- 4月 第一高等学校文科甲類に入学。
- 昭和 3年 3月31日 同校を卒業。
- 4月 1日 東京帝国大学文学部英吉利文学科に入学。
- 昭和 4年 5月 同学部言語学科に転科。
- 昭和 6年 3月31日 同学部言語学科を卒業。東京帝国大学文学部副手を嘱託される。（昭和7年5月31日まで）
- 4月30日 東京帝国大学文学部大学院に入学。（昭和11年3月30日満期退学）
- 昭和 7年 4月30日 東京帝国大学特選給費学生に選定される。（昭和8年8月31日まで）
- 昭和 8年 6月16日 日本学術振興会より東洋言語学研究のため2ヶ年の援助を受ける。
- 10月 8日 旧満州国に留学。北満およびホロンバイルに主として滞在して、アルタイ諸言語を研究する。
- 昭和11年 2月18日 留学地旧満州国から帰朝。
- 3月31日 昭和11年度東京帝国大学文学部講師を嘱託される。（以後毎学年嘱託されて昭和17年6月17日に及ぶ。）
- 4月22日 大正大学文学部および専門部高等師範科講師を嘱託される（昭和19年まで）。
- 昭和14年 4月 1日 東方文化学院より東洋語学の研究を嘱託される（昭和23年まで）。夏、旧満州国蒙政部に招かれて、蒙古文献の研究および保存について助言し、生きている満州語口語を求めて吉林省を旅行した。

- 昭和16年 6月～7月 北京大学講師として言語学・音声学を講ずる。
- 昭和17年 6月17日 願に依り東京帝国大学文学部講師の嘱託を解かれる。東京帝国大学助教授に任ぜられ、文学部勤務を命ぜられる。
- 昭和18年 3月31日 東京帝国大学言語学講座の担任を命ぜられる。
5月26日 文学博士の学位を授与される（東京帝国大学文学部）。
- 昭和24年 5月25日 東京大学教授に補せられ、文学部勤務・言語学講座担任を命ぜられる。
- 昭和25年 5月25日 アメリカ合衆国へ出張を命ぜられる。ミシガン大学極東言語文学部の客員準教授および講師として日本語・日本語学およびアルタイ語学を講ずる。
- 昭和26年 ジョーンズ・ホプキンス大学の特別研究員（Fellow-by-Courtesy）として、蒙古から来ていた活仏 Dilowa Gegen Hutukhtu の言語を研究する（昭和27年2月まで）。
- 昭和27年 7月 5日 英国・フランス国をまわって帰朝。
- 昭和29年 4月 1日 学習院大学文学部講師を委嘱せられる（昭和44年まで）。
- 昭和36年 7月 7日 アフガニスタン国およびパキスタン国へ出張を命ぜられる。モゴール語・ウズベック語・トルクメン語を調査研究する（10月25日帰朝）。
- 昭和37年 5月31日 アメリカ合衆国へ出張を命ぜられる。インディアナ大学におけるアルタイ学者国際会議（PIAC）に参加する。
- 昭和38年 3月31日 東京大学評議員に併任される（昭和39年3月30日まで）。
- 昭和40年 7月25日 財団法人東方学会常任評議員・専門委員を委嘱される（昭和46年理事委嘱まで）。
- 昭和41年 3月 東京言語研究所運営委員長を委嘱される（ご逝去まで）。
- 昭和44年 3月31日 東京大学を退官の申し合わせにより退職。
5月27日 東京大学名誉教授の称号を受ける。
7月25日 財団法人東方学会の理事を委嘱される（平成1年9月24日まで、8期）。
- 昭和46年11月 4日 文化功労者として顕彰される。

- 昭和47年11月13日 日本学士院会員に選定される。
- 昭和53年11月 3日 勲二等旭日重光章を授与される。
- 昭和54年 3月22日 日本放送協会放送文化賞を受賞。
- 昭和57年 第13回国際言語学会議（8月29日～9月4日）を会長として主宰，引き続き，同会議記録の編集にあたり，昭和58年刊行。
- 昭和58年11月 3日 文化勲章を受章。
- 12月24日 三重県亀山市から同市名誉市民の称号を贈られる。
- 平成 7年 1月29日 神奈川県藤沢市湘南長壽園病院にてご逝去。行年86歳8ヶ月。
- 従三位に叙せられ，勲一等瑞寶章を授与される。

（東京大学文学部言語学研究室作成）

服部四郎博士 主要著作目録

〔著書〕

- 昭和 8年 『アクセントと方言』（国語科学講座-VII-国語方言学）明治書院，74頁．昭和8年8月30日．
- 昭和16年 『現代語の研究と土耳其諸方言』（報告会記録第三号）帝国学士院東亜諸民族調査室，42頁．昭和16年12月15日．
- 昭和18年 『蒙古とその言語』湯川弘文社，4+9+339頁．昭和18年4月25日．
- 昭和21年 『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』文求堂，4+146頁．昭和21年9月5日．
- 昭和26年 『音声学』岩波書店，9+271頁．昭和26年3月30日．
『音韻論と正書法』研究社，3+282頁．昭和26年6月10日．
- 昭和32年 『基礎語彙調査表』6+110+17+2頁．昭和32年8月．
- 昭和34年 『日本語の系統』岩波書店，5+410+6頁．昭和34年1月30日．
- 昭和35年 『言語学の方法』岩波書店，10+838頁．昭和35年12月24日．
- 昭和43年 『英語基礎語彙の研究』三省堂，14+310頁．昭和43年11月20日．
- 昭和59年 『音声学—録音カセットテープ，同テキスト付—』xiii+215頁+表1；カセットテープ2巻+44頁，岩波書店．昭和59年6月28日．
- 昭和61年 『服部四郎論文集 ①アルタイ諸言語の研究Ⅰ』iv+436頁．三省堂，昭和61年2月20日．
- 昭和62年 『服部四郎論文集 ②アルタイ諸言語の研究Ⅱ』iv+459頁．三省堂，昭和62年2月1日．
- 昭和64年，平成元年
『服部四郎論文集 アルタイ諸言語の研究Ⅲ』三省堂，平成元年12月20日．
- 平成 2年 『邪馬台国はどこか』朝日出版社，viii+289頁．平成2年4月10日．
- 平成 4年 『一言語学者の随想』6+486頁．汲古書院，平成4年11月．

〔編著〕

昭和39年 『アイヌ語方言辞典』岩波書店, 43+556頁. 昭和39年8月20日.

〔共著〕

昭和33年 『中原音韻の研究 校本編』〔藤堂明保氏との共著〕江南書院,
6+11+2+266+(20+52)頁. 昭和33年3月31日.

〔共編〕

昭和30年 『世界言語概説 下巻』〔市河三喜博士と共編〕研究社, 12+1336
頁. 昭和30年5月10日.

〔論文〕

昭和 3年 三重県亀山町地方の二音節語について. 『音声学協定会報』第11号,
11頁; 第13号, 11頁; 第14号, 6-7頁; 第17/18号, 5頁. 昭和3
年11月30日; 昭和4年3月31日, 5月31日; 昭和5年4月8日.

昭和 4年 東京の「ウ」と三重県の「ウ」. 『音声学協定会報』第16号, 6-7頁.
昭和4年12月10日.

昭和 5年 近畿アクセントと東方アクセントの境界線. 『音声の研究』第3輯,
131-144頁. 昭和5年3月31日.

昭和 6年 国語諸方言のアクセント概観 (一) ~ (六). 『方言』第1巻1号,
11-33頁; 3号, 14-24頁; 4号, 11-27頁; 第2巻2号, 1-12頁; 4
号, 18-26頁; 第3巻6号, 5-18頁; 昭和6年9月1日, 11月1日,
12月1日; 昭和7年2月1日, 4月1日; 昭和8年6月1日.

昭和 7年 「琉球語」と「国語」との音韻法則. 『方言』第2巻7号, 1-16頁;
8号, 8-31頁; 10号, 8-23頁; 12号, 21-35頁. 昭和7年7月1日,
8月1日, 10月1日, 12月1日.

昭和10年 朝鮮語動詞の使役形と受身・可能形. 『藤岡博士功績記念 言語学
論文集』423-446頁. 岩波書店. 昭和10年12月10日.

昭和11年 外国語の記述的研究について—蒙古語に「有難う」と「さよなら」

- の無い話を含む一。『方言』第6巻9号, 1-28頁。昭和11年9月1日。
- 昭和12年 満州語音韻史の爲めの一資料。『音声の研究』第Ⅵ輯, 279-294頁。
昭和12年3月1日。
- 昭和14年 蒙古語文語の起源について。『言語研究』第3号, 1-27頁。昭和14
年9月25日。
- 昭和15年 タタール語の数詞のアクセント。『音声学協会会報』第62/63号,
21-24頁。昭和15年6月30日。
ブリヤート方言の分類。『蒙古学報』第1号, 40-86頁。昭和15年7
月15日。
- 昭和16年 蒙古語の口語と文語。『蒙古学報』第2号, 134-191頁。昭和16年4
月29日。
タタール語の述語人称語尾とアクセント。『言語研究』第7/8号,
68-82頁。昭和16年4月30日。
Mongol か Mangol か。『東方学報』第12巻2号, 241-255頁。昭和
16年9月15日。
- 昭和17年 補忘記の研究—江戸時代初期の近畿アクセント資料として—。日本
方言学会編『日本語のアクセント』125-129頁。中央公論社, 昭和
17年3月31日。
- 昭和19年 元朝秘史蒙古語の o 及び ö に終る音節を表はす漢字の支那語音の簡
略ローマ字転写。『橋本博士還暦記念 国語学論集』67-95頁。岩波
書店, 昭和19年10月30日。
- 昭和22年 分節について—特に日本語及び英語に関して—。『市河博士還暦祝
賀論文集』第2集, 131-146頁。研究社, 昭和22年7月15日。
- 昭和23年 音韻体系について—新潟県の一方言を例として—。『国語学会会報』
第9号, 2-4頁。昭和23年2月29日。
日本語と琉球語・朝鮮語・アルタイ語との親族関係。『民族学研究』
第13巻2号, 109-131頁。昭和23年12月15日。
- 昭和24年 具体的言語単位と抽象的言語単位。『コトバ』復刊第2巻12号,
16-27頁。昭和24年6月1日。

- 昭和25年 附属語と附属形式. 『言語研究』第15号, 1-26頁. 昭和25年4月30日.
- 昭和26年 メンタリズムかメカニズムか? 『言語研究』第19/20号, 1-22頁. 昭和26年12月25日.
蒙古語チャハル方言の音韻体系. 『言語研究』第19/20号, 68-102頁. 昭和26年12月25日.
- 昭和28年 意味に関する一考察. 『言語研究』第22/23号, 21-40頁. 昭和28年3月31日.
方言研究私見. 『言語生活』第24号, 13-21頁. 昭和28年9月1日.
- 昭和29年 音韻論から見た国語のアクセント. 『国語研究』第2号, 2-50頁. 昭和29年3月31日.
「言語年代学」即ち「語彙統計学」の方法について一日本祖語の年代一. 『言語研究』第26/27号, 29-77頁. 昭和29年12月25日.
- 昭和30年 音韻論 (1). 『国語学』第22集, 88-104頁. 昭和30年9月30日.
満州語の一人称複数代名詞. [山本謙吾氏と共同執筆] 『言語研究』第28号, 19-29頁. 昭和30年10月20日.
- 昭和31年 満州語口語の音韻の体系と構造. [山本謙吾氏と共同執筆] 『言語研究』第30号, 1-29頁. 昭和31年9月30日.
音韻論 (2). 『国語学』第26集, 39-56頁. 昭和31年10月11日.
母音の鼻音化と鼻音. [山本謙吾, 藤村靖両氏と共同執筆] 『小林理学研究所報告』第6巻4号, 226-235頁. 昭和31年12月28日.
- 昭和32年 日本語の母音. [山本謙吾, 小橋豊, 藤村靖, 三氏と共同執筆] 『小林理学研究所報告』第7巻1号, 69-79頁. 昭和32年3月.
音韻論 (3). 『国語学』第29集, 77-103頁. 昭和32年6月25日.
アイヌ語における年長者層特殊語. 『民族学研究』第21巻3号, 38-45頁. 昭和32年8月25日.
日本語の系統一音韻法則と語彙統計学的“水深測量”一. 武田祐吉編『古事記大成 3: 言語文字篇』1-95頁. 平凡社. 昭和32年12月25日.

- ソシュールの langue と言語過程説. 『言語研究』第32号, 1-42頁.
昭和32年12月31日.
- 昭和34年 蒙古祖語の母音の長さ. 『言語研究』第36号, 40-54頁. 昭和34年
10月20日.
- 昭和35年 アイヌ語諸方言の基礎語彙統計学的研究. [知里真志保氏と共同執筆]
『民族学研究』第24巻4号, 307-342頁. 昭和35年11月30日.
- 昭和36年 アイヌ語カラフト方言の「人称接辞」について. 『言語研究』第39
号, 1-20頁. 昭和36年3月10日.
Prosodeme, Syllable Structure, and Laryngeal Phonemes. Bulletin
of the Summer Institute in Linguistics, Vol. 1: Studies in Descriptive
and Applied Linguistics, pp. 1-27. International Christian
University, Tokyo. [July]
- 昭和39年 意義素の構造と機能. 『言語研究』第45号, 12-26頁. 昭和39年3
月30日.
言語の音声と意味. 『国語学』第56集, 1-16頁. 昭和39年3月30日.
- 昭和40年 日本の記述言語学 (一). 『国語学』第62集, 1-18頁. 昭和40年9
月30日.
- 昭和41年 日本の記述言語学 (二). 『国語学』第64集, 1-30頁. 昭和41年3
月30日.
- 昭和42年 単語の意味の面接調査. 『ことばの宇宙』第2巻3号, 19-29, 72頁.
昭和42年3月1日.
やま, もり, たけ. 『国語学』第69集, 66-73頁. 昭和42年6月30日.
言語の構造と機能. 『東京大学公開講座9 言語』3-27頁. 東京大学
出版会. 昭和42年6月30日.
The Principle of Assimilation in Phonemics. Word, Vol. 23, No.
1/2/3; Linguistic Studies presented to André Martinet, Part 1:
General Linguistics, pp. 257-264. [Dec.]
- 昭和43年 意味. 『岩波講座 哲学11: 言語』283-338頁, 昭和43年10月22日.
八丈島方言について. 『ことばの宇宙』第3巻11号, 92-95頁. 昭

- 和43年11月1日.
- 昭和44年 アイヌ語の《大》《小》《太》《細》等々を表わす“形容詞”. 『国語研究』28号, 2-13頁. 昭和44年5月5日.
- 昭和45年 語尾の弱化—印欧語尾に言及しつつ. 『言語の科学』第1号, 1-7頁.
昭和45年1月20日.
言語・文化における人間性・個性・社会性. 『思想』1970年6号,
871-874頁. 昭和45年6月5日.
- 昭和46年 アイヌ語の《熱》《温》《冷》《寒》などを表わす“形容詞”. 『金田一博士米寿記念論集』820-805頁. 三省堂. 昭和46年10月15日.
- 昭和47年 Initial Plosives of Proto-Mongolian and their Later Developments—with Two Additional Remarks: I. Phonemicization of Monguor, II. On the Original Text of the *Yuan-ch'ao Mi-shih*—. 『言語の科学』第3号, 63-92頁. 昭和47年5月30日.
タタール語の成立とチュワン族の起源. 『東方学会創立二十五周年記念 東方学論集』840-828頁. 昭和47年12月1日.
- 昭和48年 The Chinese Dialect on Which the Transcription of the *Yuan-ch'ao Mi-shih* was Based. *Acta Asiatica*, No. 24, pp. 35-44. [March]
アクセント素とは何か? そしてその弁別の特徴とは?—日本語の“高さアクセント”は単語アクセントの一種であって“調素”の単なる連続にあらず—. 『言語の科学』第4号, 1-61頁. 昭和48年6月30日.
- 昭和49年 基礎語彙について (1) (2). 『英語展望』No. 46, 32-37, 19頁; No. 47, 25-30, 16頁. 昭和49年7月9日. 10月1日.
『元朝秘史』における「古温」〈人〉という語について—秘史蒙古語再構の方法に関して—. 『宇野哲人先生白寿祝賀記念 東洋学論叢』815-828頁. 東方学会. 昭和49年10月1日.
意義素論における諸問題. 『言語の科学』第5号, 1-38頁. 昭和49年12月30日.
- 昭和50年 〈特別講演〉言語音声の耳による観察と機械による実験. 『音声言

語医学』第16巻1号, 6-15頁. 昭和50年2月28日.

基礎語彙について (3) (4) (5). 『英語展望』No. 48, 26-31頁;
No. 49, 41-42頁; No. 51, 26-34頁. 昭和50年2月1日, 4月1
日, 10月1日.

母音調和と中期朝鮮語の母音体系. 『言語の科学』第6号, 1-22頁.
昭和50年12月15日.

The Analysis of the Sememe into its Ultimate Sememic Features.
Revue Roumaine de Linguistique, T.XX, No. 5: Hommage à A.
Rosetti, pp. 501-504. Academie Republicii Socialiste România,
Bucarest, 1975.

昭和51年 上代日本語の母音体系と母音調和. 『言語』第5巻6号, 2-14頁. 昭
和51年6月1日.

上代日本語の母音音素は六つであって八つではない. 『言語』第5巻
12号, 69-79頁. 昭和51年12月1日.

昭和52年 Utterance と Sentence. 『ロマンス語研究』第11号: 小林英夫先生
古希記念論文集. 中巻, 78-90頁. 日本ロマンス語学会. 1977年11
月20日.

昭和53年 日本祖語について (1) ~ (10). 『言語』第7巻1号, 66-74頁; 2
号, 81-91頁; 3号, 81-90頁; 6号, 98-107頁; 7号, 97-105頁; 8
号, 88-96頁; 9号, 90-101頁; 10号, 94-103頁; 11号, 108-117
頁; 12号, 107-115頁. 昭和53年1月1日, 2月1日, 3月1日, 6月
1日, 7月1日, 8月1日, 9月1日, 10月1日, 11月1日, 12月1日.
アルタイ諸言語・朝鮮語・日本語の母音調和. 『言語』第7巻, 4号,
80-88頁. 昭和53年4月1日.

昭和54年 日本祖語について (11) ~ (22). 『言語』第8巻1号, 97-106頁; 2
号, 107-116頁; 3号, 87-97頁; 4号, 106-117頁; 5号, 114-123
頁; 6号, 118-125頁; 7号, 110-119頁; 8号, 108-116頁; 9号, 108-
118頁; 10号, 105-115頁; 11号, 97-107頁; 12号, 100-114頁.
昭和54年1月1日, 2月1日, 3月1日, 4月1日, 5月1日, 6月1日, 7

月1日, 8月1日, 9月1日, 10月1日, 11月1日, 12月1日.

「語音翻訳」を通して見た15世紀末の朝鮮語の発音. 『言語の科学』第7号, 1-19頁. 昭和54年3月30日.

音韻法則の例外—琉球文化史への一寄与—. 『日本学士院紀要』第36巻2号, 53-79頁. 昭和54年6月12日.

Language Universals. Georger Bedell, Eichi Kobayashi, Masatake Muraki, eds.: *Explorations in linguistics—Papers in Honor of Kazuko Inoue*—, pp. 147-150. Kenkyusha, 1979 [30 June]

昭和56年 現代ソウル方言において起こりつつある母音の通時的変化. [金東俊・梅田博之・渡辺吉裕と共著] 『言語の科学』第8号, 11-56頁. 昭和56年2月28日.

昭和58年 橋本進吉先生の学恩—『元朝秘史』音訳漢字の使用法に言及しつ—『国語学』133集, 1-14頁. 昭和58年6月30日.
蒙古諸言語の「*i 折れ」再説(上)(下)—paper phonetics 的思考を防ぐために—. 『言語』第12巻11号, 100-105頁; 12号, 104-108頁. 昭和58年11月1日, 12月1日.

昭和60年 単語の「意味」と「音形」との連合. 『言語』第14巻5号, 112-113頁. 昭和60年6月1日.

現代ソウル方言において起こりつつある母音の通時的変化—統論. 『言語』第14巻8号, 96-106頁. 昭和60年8月1日.

昭和62年 蒙古語の qayan 《皇帝》と動詞語幹 qaya- 《閉める》との関係. 『東方学会創立四十周年記念 東方学論集』972-954頁. 昭和62年6月30日.

昭和64年, 平成元年

言語の構造と体系. 『言語研究』第95号, 1-31頁. 平成元年3月25日.

(東京大学文学部言語学研究室作成)